



牧野 千代加さん
Makino Chiyoka

〔府領区〕

まきの ちよか / 株式会社まきの農園代表。これまで父が取り組んできた農業を法人化により継承。地域の耕作放棄地などを活用し、稲作や大豆等の生産に娘と2人で取り組んでいる。

食卓の笑顔を思い浮かべ、娘と二人三脚で歩む農業の道

乙女台地の裾野に広がる田畑の前に、明るい笑顔を見せるのは、株式会社「まきの農園」の代表、牧野千代加さん。今から約二十年前、父が取り組む農地を受け継ぎ、農業の

道に進んだ。

しかし、実際に農業に足を踏み入れると、地域の農業従事者の高齢化や担い手不足を痛感。地域の生産者から耕作放棄地を受け入れつつ事業を

拡大した。

平成24年には、娘と共に法人化。「地域の農業、農地は私たちが守る」を理念に、女性2人で米・麦・大豆を中心とした大規模省力低コスト経営を実践している。

昨年には「熊本県農業コンクール大会」にて、経営団体部門の優良賞を受賞。機械や



栽培方法の省力化技術の積極的な導入、作付けローテーションなどによる安定した生産が評価された。

牧野さん親子はこれまで、生産者が持つ耕作放棄地を一手に引き受け、15畝を当面の目標に、今では13畝の土地で、米・麦・大豆、ハウス栽培によるスイートコーンを生産。更に、栗林も新たに増設した。毎日早朝から娘と作業される牧野さんは「娘と一緒に農業をしてきているから、これまで続けてこられました」と話す。

繁忙期には離れて住む息子



写真上) 麦畑の近くにあるビニールハウスの中にはスイートコーンが育ち始めている。一つのハウスの中に約2000本の苗が植えられている。甲佐町のスイートコーン収穫量は熊本県で3位。

たちも手伝いに訪れ、和気あいあいと作業を進めるとのこと。

最近では自家消費用として黄色唐辛子の栽培も始め、商品化や販路の拡大など、新たなチャレンジに向けて構想も練っている。

生産された作物はJAや直接取引にて消費者の元へ届けられる。「食卓での皆さんのニコニコ笑顔を思い浮かべて、毎日の仕事を頑張ります」と、笑顔で話される牧野さんは、新たな可能性や夢を楽しみにしつつ、甲佐の農業の未来を見すえている。